



Yukinori Sagoh



Yasuo Asaga



Masayuki Imaida



Takashi Manabe



Hiroki Oyama



Yoshinosuke Nishijo



Daisuke Fujisawa



Tetsuya Fukunaga



Ryota Kondo



Hiromitsu Nishizaki



Naiwala P. Chandrasiri



Mitsuru Fujita



Rogermartin Agustin



Toru Katagiri



Yuhei Sakaguchi



Tomoki Kawagishi



Akihiro Terada



Norishige Jikei



Kazunari Matsuno



Shoichi Taniguchi

技科大の顔

09

2025年 秋号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系	石黒 仁大
電気・電子情報工学系	内藤 初月
電気・電子情報工学系	久野 倭
電気・電子情報工学系	母良田 友
建築・都市システム工学系	末廣 杏月



佐郷 幸法

Yukinori Sagoh

2015年 機械工学専攻 修士
寺嶋一彦 研究室

1985年 大分県生まれ
大分高専 卒業

2015年 株式会社ケーイーアール 入社

2021年 豊田工業高等専門学校 機械工学科 講師

2024年 豊田工業高等専門学校 機械工学科 准教授
現在に至る

2021年4月に豊田高専の機械工学科に講師として着任しました佐郷幸法です。大分高専の電気電子工学科を2008年3月に卒業して豊橋技術科学大学の生産システム工学課程に3年次編入学し、豊橋技術科学大学大学院の機械工学専攻で博士(工学)を取得しました。その後、民間企業で6年間ものづくり(操作インタフェース、パワーアシスト台車、移動ロボット、他)の仕事に励んでいましたが、縁あって高専の教員となりました。これまでの研究と実務、ロボコンの経験を生かしたものづくり教育を実践できるよう、高専教員として職務を全うすべく日々励んでいます。

NHKロボコンが好きで高専ロボコン・大学ロボコン・ABUロボコンに出場し、修了後も縁あって赤ゾーンで副審を担当していた時期がありました。現在は、豊田高専で高専ロボコンと学生ロボコンの指導をしており、学生ロボコン2023では準決勝で豊橋技科大チームと対戦することになり惨敗しました。当時の豊田高専チームのチームリーダーが、2025年の豊橋技科大チームのダンクロボットの設計者・操縦者となり活躍しています。私が指導した学生が大学でも活躍しており、彼の成長に感慨深いものを感じました。

高専教員を目指したきっかけは大分高専在学時に「いつかはロボコン指導をしたい」と恩師に相談したことです。様々なアドバイスをいただき、これまでに関わった多くの人たちのおかげで「ロボコンの指導教員になる」という願いを叶えることができました。現在は、研究活動による自らの願い実現だけでなく、教育活動による学生の願い実現のサポートも取り組んでいます。学生が願いを実現できるきっかけとなれるよう、より一層精進してまいります。



今井田 昌幸

Masayuki Imaida

1997年 生産システム工学課程 卒業
寺嶋一彦 研究室

1973年 兵庫県生まれ
兵庫県立姫路西高等学校 卒業

1997年 株式会社トーマー 入社

2008年 トヨタ自動車株式会社 入社

現在 同上 新事業企画部
ヘルスケア事業室 室長

中学生の頃、テレビでロボコンを見て衝撃を受けました。未知の仕組みが形となり動き出す姿に心を奪われ、「自分ものづくりに挑戦したい」と思いました。高校は普通科でしたが、その思いを胸にこの大学を選びました。高専出身の仲間が多く、1年生から専門を深く学べる環境に恵まれ、基礎から応用までじっくり技術に向き合うことができました。

大学時代は4年間ロボコン一筋。4年連続でドライバーを務め、3・4年目は全国優勝を達成しました。歓喜の裏には数え切れない試行錯誤と失敗があり、仲間や先輩方と築いた絆こそ最大の財産でした。

卒業後は眼科医療機器メーカーで眼圧計などの開発に携わりましたが、愛知万博のトヨタ館に刺激を受け、「ロボットで人の役に立ちたい」との思いを強め、トヨタ自動車に転じました。現在は歩行リハビリロボット「ウェルウォーク」の開発に携わり、脳卒中などで歩行を失った方に再び歩く喜びを届ける事業を推進しています。これまでに1万人以上の患者さまに利用いただき、「すべての人に移動の自由を」という想いに向け挑戦し続けています。モビリティカンパニーとして、すべての「行きたい」を叶えていきたいと考えています。

在校生の皆さんには、失敗を恐れず挑戦を続けてほしいと思います。チャレンジと仲間との絆は必ず将来の糧になります。

最後に、このような振り返りの機会を与えていただいたことに心より感謝申し上げます。



朝賀 泰男

Yasuo Asaga

2003年 機械システム工学専攻 修士
畔上秀幸 研究室

1978年 山口県生まれ
宇部高専 卒業

2003年 (株)豊田中央研究所 入社

現在 同上 イノベティブ研究部門
データ駆動型プロセス研究領域
主任研究員

高専で研究の面白さを知ってから漠然と大学院で学びたいと思っていました。当時、有限要素法のメッシュ作成、ソルバー、可視化も自分でプログラムを組んで遊んでいたのですが、似たような研究ができないかと図書館の倉庫で機械学会の論文集を理解できないが読みあさっていました。そこで出会ったのが畔上先生の形状最適化でした。面白い形状が計算で出てくることにとても衝撃を受けました。専攻科時代にお金を貯めて、修士の面接時に「畔上研に入れば進学はしない!」と訴えていたのが功を奏し?晴れて畔上研に入ることができました。畔上研の門を叩いた初日、高専時代のスキルは全く歯が立たないことを思い知らされましたが、それでも先輩方は率先して指導してくれました。エディタ、プログラミング、Linux環境のイロハから始まり、膨大な研究室のプログラム群にひるみましたが、何とか修士2年間で自分のプログラムをコミットできるまでになりました。これらの経験は自身の身となり、会社に入ってから幾度の困難もこのスキルに助けられました。入社して数年後に、形状最適化を一度やめて専門を変えてみると言われてました。恩師の理論に乗っかっているだけなので、オリジナリティを追求しろということでした。自動車産業の変革や計算力学ソフトの大衆化もあり、その時「設計工学」を軸とした研究ならオリジナリティが出せそうだと直感しました。新しい専門分野で自分の論文が引用され、査読者から激励を頂いた時はとても嬉しかったですね。「専門」という言葉について、ある方に言われたことを紹介します。「みんな専門、専門と言うけれど、世界最先端の研究者ですか?だから専門外と思って一生懸命学ばないといけな。自分が専門と思っているのはとても小さい領域なんです」と。



真鍋 孝

Takashi Manabe

1988年 生産システム工学専攻 修士
中村雅勇 研究室

1963年 香川県生まれ
高松高専 卒業

1988年 住友電気工業株式会社 入社

2000年 SEIロジネット株式会社 出向

現在 SEIロジネット株式会社
取締役 物流事業部長

私は中学時代に機械系が好きならばと高松高専を推薦され入学、その後豊橋技術科学大学生産システム工学課程の3年次に編入しました。研究室では異金属の圧縮による接合技術に取り組み、成長することができました。

住友電工では入社して5年後頃から海外進出する時代となり、私は設備技術を担当して中国や厄国に出張して設備の据え付けを経験しました。その縁があっか、物流部門に異動して各製造部門の設備輸出に多く携わると同時に、国内輸送や輸出入関係など物流全般を学びました。学生時代とは全く異なる分野であり、正直やっていけるかなとも思いつつ色々な課題に取り組みました。

主な業務内容は物流改善による輸送費低減活動ですが、輸送ルート変更、まとめ輸送、業者変更など様々で、それを立案するのですが、ここからが大変になります。一つの改善を進めるにも関係者が多く、それを納得させて実行してもらう必要があるためです。現状を変更したくないのが多勢なので、資料を作成して説明し納得してもらう必要があります。この取り組みを多く進める中で役職がついていき、指導する立場になりました。また、それが評価され、東南アジアにある関係会社の物流支援をする初代の責任者を任され46歳から5年間星国に駐在し、仕事でもプライベートでも充実した時を過ごしました。

振り返ると、論理的な思考と色々な立場の人との人間関係構築力が役立ちました。これは、研究室時代の試行錯誤や発表/説明の多くの機会を通じて得られた能力ですし、中学から高専まで運動部に所属し人間関係を学んだことと思いますが、反省はもっと語学力を磨いておけばよかったと考えています。

最後に、豊橋技術科学大学の益々の発展を心より祈念しております。



大山 泰生

Hiroki Oyama

2012年 電気・電子情報工学専攻 修了
澤田和明 研究室

1987年 愛知県生まれ
人間環境大学附属岡崎高等学校 卒業

2012年 浜松ホトニクス株式会社 入社
現在 同上 固体第7製品設計部
57部門 チームリーダー

2006年に普通科高校から豊橋技術科学大学電気・電子工学課程に入学しました。高校1年の時にオープンキャンパスに行き、石田先生・澤田先生・高尾先生の研究室を見学させて頂き、将来、この研究室で半導体・MEMSデバイスの研究をやってみたいと思ったことが懐かしいです。在学中は、澤田先生・高橋先生のもとで、CMOSとMEMSの複合デバイスを研究させて頂きました。先生や先輩、中間のサポートのおかげで、新しいテーマでしたが、MEMSファブリケロー干渉フィルタとCMOSを組み合わせたデバイスを形にすることができ、この時の経験、特に新しいことへの挑戦する精神は、現在の業務にも役立っています。浜松ホトニクスでは、MEMSデバイスのデバイス設計、光学設計、筐体設計、制御回路設計など幅広く業務に携わっております。豊橋技術科学大学のらせん型教育で学んだ知識は、非常に実践向きで、幅広い業務をこなすのに非常に助けになっています。小型、高性能、低価格はもちろんのこと、MEMSデバイスは、制御面が難しいため、使いやすさも追求することを目標に、開発・改良業務に日々励んでおります。最近は、お客様の開発部門の方と意見交換を行う機会が増えてきており、ニーズを的確にとらえ開発・改良へつなげる大切さを感じています。会社売上げの貢献ももちろんのこと、社会に貢献できるような製品をつくれるようにこれからも邁進してきたいと思っております。社会に出て一番強く感じたことは、コミュニケーション能力の大切さです。先方のエンジニアと、誤解なく技術情報をやり取りすることの難しさを日々の業務で感じています。是非、積極的に色々な人とコミュニケーションをとってみてください。社会人になった時、きっと大きな財産となると思います。



藤澤 大介

Daisuke Fujisawa

2005年 電子・情報工学専攻 修了
澤田和明 研究室

1977年 香川県生まれ
高松高専 卒業

2005年 三菱電機(株) 入社
2023年 (一財)マイクロマシンセンター 出向
現在 同上 調査研究・標準部 部長

私は、高松高専(現在の香川高専)卒業後、豊橋技術科学大学 電気・電子工学科に編入学しました。大学では集積回路グループ(当時のICG)に入り、半導体材料であるシリコンを用いた電界電子放出デバイスや強誘電体材料を用いた赤外線検出デバイスの研究を行うことができました。豊橋技科大は、半導体デバイスを作製することが可能なクリーンルームを保有しており、半導体デバイスの設計、作製、評価の一連を経験することができ、このような大学でのものづくりの経験は三菱電機株式会社へ入社後の研究開発活動へも役立てることができたと思います。

2023年からは一般財団法人マイクロマシンセンターにおいて、半導体技術を用いたMEMS(Micro Electro Mechanical Systems)関連の国際標準開発およびIEC/TC47/SC47Fの国内委員会事務局業務や、MEMS分野の国内外の技術動向調査などを行っています。国際標準開発や技術動向調査では、企業の有識者や大学の先生方にも参画いただいている委員会によって各事業を推進しています。委員会では、大学時代の指導教官である澤田先生や豊橋技科大の卒業生にお会いすることもあり、大変お世話になっています。

学生の皆さんは、研究されている専門分野に加えて広い視野を持って、様々な分野の人との交流を大切にしてほしいと思います。



西城 吉之助

Yoshinosuke Nishijo

2008年 電気・電子工学専攻 修了
澤田和明 研究室

1983年 熊本県生まれ
熊本電波高専 卒業

2008年 株式会社東芝 入社

2017年 東芝メモリ株式会社(会社分割による承継)

2019年 キョクシア株式会社(社名変更)

現在 同上 生産技術推進部
環境企画推進担当 参事

私は、技科大時代、集積回路・センサシステムグループ(ICG)に所属し、半導体デバイスの製造プロセスを自ら考え、試行錯誤するプロセス技術の楽しさを知り、東芝の半導体プロセス技術開発部門を志望して入社しました。プロセス開発部門では、成膜やエッチング、イオン注入、アニール等、様々な業務に携わりましたが、技科大で得た知識や経験を大いに活かすことができました。条件出しやSEM観察等、大学研究と同じようなことをして評価され、給料をもらうことができる事実には衝撃を受けたことを今でも憶えています。しかし、拠点や部門再編のあおりを受け、川崎、横浜、姫路、加賀、四日市等、国内各地の転勤が続いたため、今後のキャリアや家庭を勘案し、東芝の社内FA制度を利用して、2015年に半導体の環境部門へ転籍しました(その後、東芝の半導体メモリ事業が分社化し、社名もキョクシアとなりました)。現在は、これまでの経験と知見を活かして、持続可能な社会の実現に貢献すべく、環境負荷に配慮した事業活動の推進に携わっています。最近では、気候変動に対する取組みとして、自社工場へ太陽光発電システムを導入するプロジェクトを主導しました。

昨今では、半導体は社会を支える上で不可欠な戦略物資とみなされ、経済安全保障上の重要性も増えています。半導体の技術者は高いニーズがあり、日本でも人材育成が急務となっています。豊橋技科大は、半導体を一貫製造できる研究施設を有し、そこで習得した技術と知識、経験は企業でも即戦力の人材として活躍できる原動力になると思います。月並みですが、学生の皆様には、研究を通じた様々な知識や技術の習得はもちろん、公私ともに色々なものに挑戦・経験し、半導体業界をリードできる人材になってほしいと思います。



福永 哲也

Tetsuya Fukunaga

1988年 電気・電子工学専攻 修了
野口精一郎・太田昭男 研究室

1963年 岐阜県生まれ
岐阜高専 卒業

1988年 日本アイ・ピー・エム 入社

1992年 岐阜工業高等専門学校電子制御工学科 助手

1994年 豊橋技術科学大学電気・電子工学系 助手

1996年 岐阜工業高等専門学校電子制御工学科 助手

現在 岐阜工業高等専門学校電子制御工学科 教授

生まれは飛騨の山奥で、岐阜高専の学生になった時にはクラスで一番遠い所から来た学生でした。5年間高専の寮で過ごしその後豊橋技科大でも2年間寮で過ごし、合計7年間寮で過ごしました。豊橋を修了した後、4年間の会社勤めを経て岐阜高専の教員に採用して頂きました。結果として人生の半分以上は岐阜高専にいたことになります。

岐阜高専に来てからは豊橋の太田先生にお世話になり、学位も取得させて頂きました。太田先生には国際会議での発表もさせていただき多くの経験を積むことができました。また、同じ研究室の先輩で豊橋の先生になられた方もみえますし、私が豊橋の助手時代(岐阜高専から2年間行かせていただきました)と一緒に研究を進めた方も豊橋の先生になられています。岐阜高専と豊橋技科大は私の人生にとって切り離すことのできない大切なものとなっています。

高専では、学級担任や学科長等多くの仕事を経験し、クラブ顧問でもサッカー部、剣道部、ハンドボール部、バスケットボール部、ロボット研究会と多くの部活動の顧問を経験させて頂きました(特にスポーツが得意だった訳ではありませんが、人員不足でなりゆきでこのように多くのスポーツ部の顧問をやりました)。豊橋の学生時代は長い時間をかけて研究に没頭できる貴重な時間であったと思いますが、教員になってからは自分が学生時代にみていた先生という職業とは違い仕事の量が多く大変です。中でも頑張っているのは、豊橋で身に付けた基礎と学生時代にサッカー部で鍛えた(中学、高専、大学、社会人、顧問とサッカーにかかりました)体があるからだと思っています。今後いろいろな部活動などを通して体を鍛えていきたいと思っています。



近藤 亮太

Ryota Kondo

2021年 情報・知能工学専攻 修了
北崎充晃 研究室

1993年 愛媛県生まれ
愛媛県立三島高等学校 卒業

2021年 日本学術振興会
特別研究員PD(慶應義塾大学)

2024年 東京大学VRセンター 特任助教
現在に至る

高校卒業後、豊橋技術科学大学へ学部1年生として入学し、博士課程終了まで9年間に在籍しました。学部4年次には北崎充晃先生の研究室に入り、バーチャルリアリティ (VR) を活用した心理学研究を行いました。特に、アバタがあたかも自分の身体のように感じる錯覚について研究を行い、このテーマは技科大を離れた今でも私の主要な研究テーマになっています。

技科大卒業後は、日本学術振興会特別研究員PDに採択され、慶應義塾大学の杉本麻樹先生の研究室で3年間研究を行いました。ちょうどコロナ禍だったため、オンラインに特化した研究スタイルが、研究室の中でも、自分自身の中でも確立されていったことを記憶しています。今まで研究室に来ることが当たり前でしたが、その常識は覆り、今ではすっかりZoomミーティングが多くのラボで定着したと思います。

2024年4月からは東京大学VRセンターの特任助教となり、これまで行っていたVR研究に加え、メタバースについても研究することになりました。これは私自身の興味に加え、私がVR/メタバース実践寄附講座の運営に関わることになったためです。この寄附講座では、寄付いただいている企業の方に対して、毎月セミナーを行っており、そこで登壇いただく方を探るのが私の仕事になっています。登壇者を探るのは大変ですが、このセミナーがなければ会うことができなかった方もお会いでき、やってよかったと思っています。皆さんも色々頼まれることがあって大変かと思いますが、その機会を自分が楽しめるよう最大限活用するのがいいと思います。



ナイワラ チャンドラシリ

Naiwala P. Chandrasiri

1998年 情報工学専攻 修了
田所嘉昭 研究室

1970年 スリランカ Mirigama 生まれ
群馬高専 卒業

1998年 東京大学大学院 電子情報工学専攻 入学
2001年 東京大学 学振りサーチアソシエイト
2003年 東京大学 Intelligent Modeling Laboratory 研究員
2006年 日本学術振興会(JSPS) 特別研究員
2008年 トヨタIT開発センター リサーチャー
2013年 工学院大学 情報学部 准教授
2017年 同上 教授 現在に至る

国費留学生として来日後、群馬工業高等専門学校を経て豊橋技術科学大学情報工学課程に編入学しました。学部および修士課程では田所研究室に所属し、デジタル信号処理に関する研究に従事しました。夕方には先生や仲間と共に5キロのジョギングを続け、「よい汗をかき、よい研究をする」という充実した時間を過ごせたことは、今でも大切な思い出です。大学の駅伝大会で田所先生にバトンを渡した瞬間や、研究室の仲間と富士山に登って朝日を迎えた経験、さらには夏に伊良湖岬まで車を走らせた日々は、青春の宝です。その後、東京大学大学院電子情報工学専攻博士課程に進学し、原島・苗村研究室で研究に専念しました。2001年には「顔表情の分析・認識・合成とその知的画像符号化への応用」という題目の博士論文を提出し、博士号を取得しました。国際会議での発表や学術論文執筆を通じて研究者として成長するとともに、学術的な国際交流の重要性を学びました。東京大学およびJSPSのポスドクを経て、トヨタIT開発センターにおいて知能情報処理システムの研究開発に携わり、産学連携の貴重な経験をえました。2013年より工学院大学情報学部准教授、現在は教授として知能メディア処理研究室を主宰し、“Enjoy the Challenge”を理念に掲げ、失敗を恐れず、課題に積極的に挑戦できる若者の育成に努めています。豊橋技術科学大学での四年間は、研究、寮生活、課外活動のすべてにおいて充実しており、そこで得た経験は研究者としての姿勢や後の教育者としての価値観を培ううえで大変貴重なものでした。これらの学びが私の基盤を築き、その後の歩みに大きくつながっていることを、ここに皆様へ心より深く感謝申し上げます。



西崎 博光

Hiromitsu Nishizaki

2003年 電子・情報工学専攻 修了
中川聖一 研究室

1975年 兵庫県生まれ
津山高専 卒業

2003年 山梨大学大学院 助教
2016年 山梨大学大学院 准教授
現在 同上 教授 兼 国際化推進センター長

私は、年に一度は海外のとある大学に2週間ほど赴き、英語で授業をしています。しかし、高専出身者の宿命か、昔は(今も?) 英語が大の苦手で、大学院入試のために初めて受けたTOEICは315点というひどい有様でした。

そんな私の人生の転機となったのが、人工知能、特に音声認識の研究に惹かれて門を叩いた中川聖一先生との出会いです。ここで待ち受けていたのが、毎週の英語論文輪講でした。まさに暗黒時代の到来です。しかし、この輪講で厳しくご指導いただいたおかげで、苦手だった英語と真正面から向き合うことを余儀なくされ、研究者としての基礎と共に英語力も鍛えられました。現在の私があるのは、恩師である中川先生のおかげだと、心から感謝しています。

まさか、あれほど英語が苦手だった自分が、山梨大学で国際化推進センター長を務めることになるとは、学生時代の私には想像もつきませんでした。人生とは実に面白いものです。この「目の前の課題に向き合い、乗り越える」という経験は、私の研究スタイルそのものにもなりました。音声処理という専門分野から始まり、今では学生の頃は専門外だったロボットの開発まで手掛けていますが、これも未知の分野へ挑戦する技科大で培われた精神の賜物です。

大学は、自分の弱みを強みに変えられる場所です。技科大にはそのための最高の環境が揃っています。どうか失敗を恐れずに、たくさんのごことに挑戦してください。必死に取り組んだ経験と、そこで出会った仲間たちとの繋がりは、一生の財産になります。私自身、当時の同期とは今でもたまに集まるほど、かけがえない関係を築くことができました。皆さんの輝かしい未来を心から応援しています。



藤田 充

Mitsuru Fujita

1988年 情報工学専攻 修了
阿部健一 研究室

1964年 愛媛県生まれ
詫間電波高専 卒業

1988年 日本高速通信株式会社 入社
1990年 財団法人京都高度技術研究所 入所
1995年 日本電装株式会社 入社
1996年 株式会社デンソー(社名変更)
2020年 PT DENSO SALES INDONESIA 出向
現在 同上 新規事業 Project Manager

中学3年のとき、転校してきた同級生の友人がアマチュア無線をしていて、その影響で私も無線に興味を持つようになりました。遊び惚けていた生活から一転、半年間猛勉強して詫間電波高専に滑り込むと、高専では学年が進むにつれて情報工学の面白さに惹かれ、卒業後に技科大へ編入しました。阿部研究室では、制御工学とその応用について、理論と実践の両面から学ぶことができました。卓球部、技科大祭、開学記念駅伝など、どれも良い思い出です。

修士課程を修了した1988年、情報通信の世界に身を置きたいという思いから日本高速通信株式会社に入社。通信事業の民営化に伴い、新電電の一つとして発足した会社で、私は第3期の新入社員でした。50名の同期は、皆とても結束していて、飲みに行ったら通信の未来について語り合っていました。

当時、日本はインターネット黎明期を迎えており、1990年、京都の財団法人高度技術研究所へ転職。WIDEプロジェクトでのネットワーク管理やインターネット技術を活用した研究に明け暮れる日々でした。そして、携帯電話の一般普及が始まりつつあった1995年、日本電装(現・株式会社デンソー)へ。事業所PHSのシステム開発が、私にとって初めての商品開発の仕事となりました。

それから30年が経ち、現在はインドネシアで新規事業に取り組んでいます。振り返ってみると、私の仕事に対するキーワードは“Something New”。何か新しいことに向かって、自分の思うままに自然体で歩んできたように感じます。歳を重ねた今でも、新しいことへの興味は尽きません。高専や技科大で身につけた「まずは手を動かす、足を運ぶ」という実践重視の基本動作は、今もなお現場で活かされており、日々その学びに感謝しながら過ごしています。



アグスティン ロジャーマーティン

Rogermartin Agustin

2014年 環境・生命工学専攻 修了
水野彰・高嶋和則 研究室

1989年 愛知県生まれ
サレジオ高専 卒業

2014年 日立アプライアンス株式会社 入社

2019年 ミネベアミツミ株式会社 入社

現在 同上 BL技術部所属

高専で電子工学を専攻していた私は、卒業後の進路を考える中で、「新しい分野に挑戦したい」という思いが強くなり、生物工学を学べるエコロジー工学課程への編入を決意しました。

編入後は、これまでの専門とは全く違う分野で難しさを感じましたが、その面白さに引き込まれました。研究室では酵母菌を用いたプラズマの殺菌メカニズムの解明に取り組み、特に印象に残っているのが中国での学会発表です。英語での質疑応答がうまくできず悔しい思いをしましたが、この経験をきっかけに英会話を習い始めたことは今でも良い思い出です。また、現在も連絡を取り合う友人や先輩に出会い、充実した学生生活を送ることができました。

卒業後は、家電メーカーである日立アプライアンスで掃除機の設計に携わりました。高専や大学で学んだ電子工学や生物工学の知識とは異なり、機械設計の知識が求められたため、最初の数年間は苦勞しました。その後、子どもの誕生を機に精密部品メーカーのミネベアミツミへ転職し、家電やOA機器向けのモーター設計を担当しています。ここでは、モーターに関する新たな知識を習得しながら業務に取り組んでいます。

これまでのキャリアを振り返ると、常に新しい分野や課題に直面し、その度に多くの壁にぶつかってきました。しかし、学生時代に培った学びや、困難な状況でも諦めずに挑戦し続ける姿勢があったからこそ、今があるのだと実感しています。在学生の皆様には、「経験がないから」と選択肢を狭めないでほしいと伝えたいです。皆様が新しいことに果敢に挑戦し自らの可能性を広げ、それぞれの道で素晴らしい活躍をされることを心から願っています。



坂口 有平

Yuhei Sakaguchi

2001年 エコロジー工学専攻修了
金熙濬 研究室

1976年 和歌山県生まれ
和歌山高専 卒業

2001年 (株)神鋼環境ソリューション 入社

2004年 (株)堀場製作所 入社

現在 (株)堀場エステック
Dry Product開発部 部長

中学生の時に機械やロボットに興味をもち、和歌山高専の機械工学科に入学しました。高専時代は同級生とロボットコンテストにも参加し、学校に泊まり込んでロボット製作に励みました。惜しくも全国大会には出場できませんでした。自分たちで手を動かして何かを作るという貴重な経験ができたのは高専だったからこそと思います。また高専の友人には器用な人が多く、設計や加工の能力の高さには感心させられたものでした。

高専では機械を学んでいましたが、それ以外にも化学や環境問題にも興味を持ち、一つの専門だけでなく広く様々な分野のことを学びたいと考えていたときに、豊橋技術科学大学のエコロジー工学というのは自分の志向に一致する学科でした。あまり迷わずに進路を選択したと思います。実際に入学してみると電気・化学から生物や遺伝子など様々な分野の講義があり、幅広い学問を学べたことは自分の財産になっていると思います。大学でも同期や研究室の皆様にも恵まれ、エネルギーな方々と関わることで、いろいろ刺激を受けた大学時代でした。

大学での研究テーマは石炭火力発電所の排煙脱硫処理でしたので、その関係で卒業後は排ガス処理設備の設計に関わり、現在はガスそのものを測定するための分析計の開発に従事しています。分析計の開発というのはいえないものを見えるようにするというので、大変やりがいを感じると同時に、大学で学んだ理論・知識の価値をより一層感じているところです。在校生の皆様も大学時代に多くを学び、貴重な時間を有意義に過ごされることを願っています。



片桐 徹

Toru Katagiri

2007年 物質工学専攻 修了
角田範義 研究室

1982年 愛知県生まれ
愛知県立岡崎西高等学校 卒業

2007年 東海光学株式会社 入社

2022年 東海光学ホールディングス株式会社 入社

現在 同上 開発本部 開発2部 係長

このような機会をいただき、誠にありがとうございます。大学院を修了してから18年が経ちますが、改めて母校と関わる場をいただけることを大変うれしく思います。

私は普通科高校から一般入試で工学部に入学生、角田先生に担当頂いた無機化学の講義に強い興味を持ちました。その後の研究室配属では希望どおり角田研究室に所属することができ、先輩、後輩、ご指導いただいた先生方、様々な友人にも恵まれ、楽しく充実した学生生活を送ることができました。

2007年3月に工学研究科物質工学専攻を修了し、眼鏡レンズメーカーに入社しました。最初はレンズ表面を保護するハードコートの開発を担当し、その後は光学関連部品の開発に携わっています。設計や試作から量産、品質管理に至るまで幅広く担当し、現在は新しい製品を形にし、それを安定して生産するための仕組みづくりを行っています。

大学・大学院での研究内容とは分野が変わりましたが、在学中に培った「課題を見つけ、仮説を立て、検証する姿勢」は、仕事で壁にぶつかった際に大きな支えになっています。研究室での試行錯誤や議論の経験は社会に出てからも財産だと実感しています。

在校生の皆さんには専門を深めると同時に、他分野にも積極的に関心を広げてほしいと思います。異なる知識や経験が新しい発想を生むことは少なくありません。ぜひ興味を持ったことに挑戦し、自分の可能性を広げてください。

最後になりますが、在校生、OBの皆さま、そして豊橋技術科学大学が今後ますます活躍し、発展されることを心よりお祈り申し上げます。



川岸 朋樹

Tomoki Kawagishi

2000年 エコロジー工学専攻 修了
平石明 研究室

1975年 愛知県生まれ
豊田高専 卒業

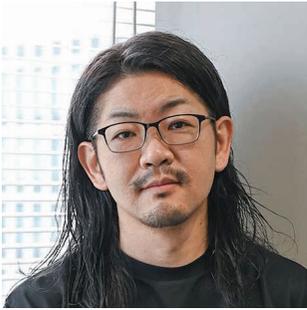
2007年 三菱レイオン株式会社 入社

2015年 三菱ケミカル株式会社 社名変更

現在 同上 アドバンスドソリューションズ
ビジネスグループ 技術開発本部
水処理技術 グループ長

自由な校風に憧れて豊田高専に入学したのが、もう35年前になります。なんとなく選んだ機械工学科でしたが、思いのほか勉強は楽しく（思い出補正込みですが）、卒業研究では管路内の流体解析に取り組みました。卒業後は新しい分野に挑戦したくなり、漠然と関心があった生物・環境分野へ進むべく、エコロジー工学課程に編入しました。当時は平石先生の微生物生態学の講義が非常に面白く、迷わず平石研究室を希望。その後は学部4年次の名古屋市下水道局での実務訓練が水処理技術への関心を深めるきっかけとなり、修士課程では生物学的排水処理を研究テーマに選びました。現在の会社に入社してからも、今日に至るまで一貫して水処理技術の開発に携わってきました。大学で学んだ微生物や環境に関する知識はもちろん、高専時代に取り組んでいた流体力学や数値計算の知見も、今の仕事にしっかりと活かされています。大学編入時には、高専で学んだことが無駄になってしまうのではと、少しだけ後悔したこともありましたが、今振り返ってみると、これまでの経験や学びが一本の線となつてつながっており、“Connecting the Dots”という言葉の意味を実感しています。

今回このような機会をいただき、自身の歩みを振り返ることができました。この場をお借りして、在学中にお世話になった先生方、研究所メンバー、友人、そして同窓会関係者の皆さまに感謝申し上げます。また在学生の皆様には、ぜひ興味のあることには何でも積極的に挑戦してほしいと思います。目の前の経験や学びがすぐには役立たなくても、長い人生でいつか必ずつながる日が訪れます。



寺田 明広

Akihiro Terada

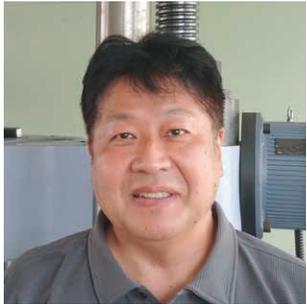
2007年 建設工学課程 卒業
加藤彰一 研究室

1984年 愛知県生まれ
愛知県立豊田南高等学校 卒業

2010年 岐阜県立国際科学芸術アカデミー 卒業
株式会社日本デザインセンター 入社

現 在 同上 ビジュアルディレクター

技科大に入学した当初、漠然と「建築家になれたらいいな」と思っていました。その道筋が明確だったわけでもなく、流れてくる毎日をただただ過ごす日々。そしてそのあやふやさが、卒業設計を前にして一気に崩れ、留年や休学を覚悟した時もありました。そんな時、研究室の先生方や先輩、友人、周囲の多くの方々の助けがあり、何とか無事に卒業を迎えられたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。どうか卒業はできたものの、就職の道は既に閉ざされており、フリーターとして過ごすこととなります。ただ、その間に経験した写真スタジオでのアルバイト、そしてその後進学した、IAMASという専門学校での学びが、現在の仕事へと繋がっていきます。専門学校卒業後、現在はデザインプロダクションにて、ビジュアルディレクター/CGデザイナーとして働いています。最近ではCGソフトよりも書類制作業務と奮闘する時間の方が長かったりもしますが笑。遠回りはしましたが、技科大で初めて触れたCGが、最終的に自分の職業となり、あの日々が無駄ではなかったのだと、今思い返しています。今日、CGアプリケーションも無料で使えるものもあり、更にAIを活用すれば、ほんの数分、あるいは数秒で画像映像が完成してしまう時代です。そんな中、プロフェッショナルとして何ができるのか、何をすべきなのかを考えさせられる毎日です。しかし、人間として培ってきた経験や感性など、AIにはまだ置き換えられない価値が確かに存在しています。これからも「人間ならではの価値と本質」を見極めながら、この大変革に適応し生きていきたいと考えています。その土台には、技科大での経験がしっかりと根を張っていると、今回の寄稿を通し改めて実感しているところです。



松野 一成

Kazunari Matsuno

1994年 建設工学専攻 修了
角徹三 研究室

1970年 広島県生まれ
呉高専 卒業

1994年 呉工業高等専門学校
建築学科 助手

現 在 同上 教授

1990年4月、呉高専の建築学科から当時は6系だった、建設工学課程に編入学をいたしました。推薦での編入学でしたので、初めて大学を訪れたのは入学式の3日くらい前だったと記憶しており、なんて辺鄙なところに連れてこられたのだろう、というのが率直な感想でしたが、いい師匠、いい友人たちに恵まれたこともあり、そんな不安は入学直後に無くなりました。「とても楽しかった。」、という想い出しか残っておりません。

4年間を豊橋で過ごし、大学院の修士課程修了後、母校である呉高専の教員になりましたために、1998年には1年間の内地留学、2001年には博士号の授与していただき、またいくつもの共同研究など、豊橋を離れてから現在に至るまでもお世話になり続けております。引き続きまして、宜しくお願い致します。その間に各種研究集会や教員の研修等々で講演させていただく等で、少しばかりは恩を返せていると思いますが、最大の恩返しは、呉高専から豊橋技科大に進学する学生を増やすことだと思っております。

教員として母校に戻ってからは、豊橋技術科学大学をアピールし続けてまいりました。私も研究室を持ち31年目になりますが、私の研究室から3年次編入した学生は10名以上で、専攻科から大学院への進学も1名ですがおります。他の高専の先生方とは比較できておりませんが、本校の教員ではトップクラスだと自負しております。今後も、残された高専での教員生活はあと10年弱ではありますが、引き続き、学生を技科大に送り続けたいと思っております。

最後になりますが、お読みいただいております方々の、今後のご健勝とご活躍を、さらに豊橋技術科学大学の今後のますますの発展を祈念いたします。



寺境 則繁

Norishige Jikei

2004年 建設工学専攻 修了
北尾高嶺 研究室

1978年 岐阜県生まれ
岐阜高専 卒業

2004年 大日コンサルタント株式会社 入社
2018年 同上 交通基盤計画部 課長

現 在 同上 西日本支社技術部 グループ長

1999年(平成11年)に岐阜高専から3年次に編入し、2004(平成16年)に大日コンサルタント株式会社に入社しました。学部では、中村俊六先生の研究室に在籍していましたが、先生の指導についていくのが精一杯で、先生をはじめ、研究室の先輩、同窓生、後輩の助けを借りて、なんとか学部を卒業することができたことを鮮明に覚えています。また、インターンでは、研究室の先輩の勤務先があった鹿児島県の家へ居候させていただきながら、鹿児島市内の建設コンサルタントで実務に従事し、単位を取得、大学院からは北尾高嶺先生の研究室に転籍し、大学院課程を無事修了することができました。

インターンで経験した建設コンサルタントの業界に興味を持ち、地元である岐阜県を本社とする大日コンサルタント株式会社に入社した後は、道路設計を専門とし、主に高速道路の新規路線の設計に従事しています。また、昨年は実務家教員の研修を通じ、インフラメンテナンスに関する実務能力と教育技術を活かし、専門教士(高専が実施するリカレント教育プログラムの講師)の資格を取得しました。

教えられる立場から教える機会が多くなり、改めて大学時代を振り返ると、先生や諸先輩方が辛抱強く指導してくださっていたことを改めて感じる今日この頃です。昔を振り返る機会が増えるにつれて、建設業界に長年籍を置いていると学生時代の友人やお世話になった先生と再会する機会も少しずつ増えてきました。在校生の皆さんも仲間と思ひ出話をたくさんつくり、社会に出た際に豊橋技科大の同窓生や先輩、後輩と盛り上げられるエピソードをたくさん作って欲しいと思います。



谷口 庄一

Shoichi Taniguchi

1988年 建設工学専攻 修了
紺野昭 研究室

1963年 兵庫県生まれ
明石高専 卒業

1988年 日本工営株式会社 環境・都市部 入社
2002年 科学技術交流財団 コア研究員

2005年 名古屋大学大学院環境学研究所 研究員
2010年 株式会社リージョナルブレインズ 代表取締役

2019年 星城大学経営学部 准教授
2024年 星城大学経営学部 教授 現在に至る

豊橋技術科学大学で紺野昭先生と出会い、都市・地方計画の世界に進むきっかけを得ました。当時は「計画大講座」という枠組みがあり、瀬口哲夫先生や小場瀬令二先生からも温かいご指導をいただきました。社会人になってからも助言を頂戴し、今日に至るまで大きな支えとなっています。

日本工営では、土木技術者が中心の建設コンサルタントの中で、都市計画専攻出身として採用されました。建築系の背景を生かしてランドスケープデザインを担当したことが、その後の仕事に大きく役立ちました。2005年に開催された愛知万博では会場計画のプロポーザルが採用され、全国の研究者や行政職員、民間企業の方々、建築家と共に議論を重ねた日々は、今も忘れられない貴重な経験です。

また2002年からは科学技術交流財団で循環型環境都市の研究に携わり、2005年には名古屋大学大学院環境学研究所の研究員としてEXPOエコマネージャーを務めました。来場者の環境配慮行動を観察しデータを集めたことは、学術的にも教育的にも大きな財産となりました。こうした万博での経験や人とのつながりは、その後の研究や講義に大きく広がりをもたらしました。

2019年にはご縁あって星城大学経営学部へ准教授として着任しました。これまで工学分野を歩んできた私にとって経営学部は新しい挑戦でしたが、異なる分野で学ぶ楽しさを味わう機会でもありました。現在は観光・まちづくり分野長と地域連携センター長を務め、ゼミ生と共に地域の現場に入り、観光と都市計画をつなげる研究や活動に取り組んでいます。これからも学びと実践を重ね、地域社会に少しでも貢献できればと願っています。